



「はい、元気です」

宮崎県教職員組合 山口 邦子

人は時として、心に抱えきれない荷物を背負うことがある。当時の私は、毎日が苦しかった。会う人、すれ違う人が、とても幸せそうに見えた。自分一人だけが取り残されていく、そんな気がしていた。でも教室で私が悲しい顔をしていると、子どもたちに心配をかけてしまう。「子どもたちに笑顔を見せること、このことが今日の務め」そう自分に言い聞かせて、当時担任をしていた小学2年生の教室に向かっていた。

その日も教室の前で大きく深呼吸をし、「おはよう」と言いながら教室に入った。子どもたちはいつものように私に寄ってきて、我れ先に「せんせい、昨日はごはん食べに言ったよ。おいしかった」「入院していたばあちゃんが、元気になって帰ってきた」などとにぎやかに話しかけてくる。「先生と話しちよるのは私だからね」と時々けんかになりそうになるのを「順番、順番。ちゃんと聞くから大丈夫」と笑いながらおさめ、「何食べたと?」「わあ、よかったねえ」などと話しながら子どもの背中をさすり、朝の提出物の整理を始めた。

始業のチャイムが鳴り、子どもたちは席に着く。「さあ、始めましょう」と教室を見渡すと全員の顔が見えた。私はほっと胸をなでおろし、日直の号令に合わせてあいさつをした。

「健康観察をします」。これもいつも通りのこと。でも、その日は少し違った。

凜さんが「先生の健康観察は?」と突然口を開いた。「ん?何?」。私はその言葉にとまどい、凜さんを見て聞き返した。「んー。だって、先生悲しそうだよ。元気がないから、まず先生の健康観察しよう。ねっ」そう言いながら凜さんは周りを見た。「そうなんだ…」と呟く私を、「せんせい!」と子どもたちが呼んだ。「はいっ、元気です」と、とっさに手を挙げて言う私。教室が笑い声でいっぱいになった。「私、笑ってる」。そう思った。

それから、私は一人目の子どもの名前を呼び、顔を上げた。子どもたちのまなざしが目に入ったその瞬間、思わず涙が溢れた。そして、ほんの少しの間だけ、立ち尽くして泣いた。「先生には、わたしたちがいるから大丈夫…。子どもたちの声が聞こえたようだった。

「健康観察」。それは、その日の子どもたち一人ひとりとの出逢いの始まり。子どもたちはさまざまな環境の中で暮らし、それぞれに思いを抱えて登校してくる。「はい、元気です」という言葉の後ろにどんな思いを抱えているのだろう。私はそんな大切なことをいつのまにか忘れて、何気なく「健康観察」をし、子どもたちの思いを見過ごしていた。

また一つ、子どもたちが教えてくれたとても大切なこと。「強くなくていい」「ありのままの自分でいい」教室。そこで共に暮らす「なかま」の「健康観察」。